



Osaka Gakuin University Repository

Title	suddenly 考 (1) On <i>suddenly</i> : Part 1
Author(s)	黒宮 公彦 (Kimihiko Kuromiya)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 72 号 : 1-17
Issue Date	2016.12.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

suddenly 考 (1)

黒 宮 公 彦

1

英語の **suddenly** が「突然に」という意味を表す副詞であることは初学者でも知っていることであり、今さらとりたてて問題にすべきことなど何もないように思われる。ところがそのように理解していると次のような文を目にして驚くことになる。

- (1) a. Ann was suddenly hungry[.] (SGT, p.405)
b. Suddenly, he no longer fits in our cave. (SYH, p.144)

日本語の感覚で捉えると (1a) は「突然お腹がすいた」ということになり、奇妙に感じる。これは (1b) も同様である¹。

その一方で、このような例はそれほど珍しいものではないように思われる。こうした文に対する違和感が本研究の出発点である。

2

(1) のような文に違和感を覚える原因の一端は、動詞（句）が状態を表していることにありと考えられる。**Vendler** (1967) は動詞（句）が表す事態を、事態と時間との関係という視点から、「状態 (state)」、「活動 (activity)」、「達成 (accomplishment)」、「到達 (achievement)」の4つに分類した。この観点から (1) を眺めると、(1a) の述部 (predicate) は < be + 形容詞 > であり、状

態を表しているといえる。また (1b) の “(no longer) fits” も「(成長して大きくなったため) 体がもうほら穴には合わない状態である」ことを表している。他方 *suddenly* は突然の状態変化を含意するのであるから、最も典型的には Vendler (1967) が「到達」² に分類した動詞群と共起する傾向があると予想される。ところが (1) では動詞が状態を表しているにも関わらず *suddenly* と共起しており、突然の状態変化、すなわち到達を含意する *suddenly* と一見すると噛み合わないため、私たちは違和感を覚えるのではないだろうか。

ここで思い出されるのは Comrie (1976:19) の次の一節である。

(2) In many languages that have a distinction between perfective and imperfective forms, the perfective forms of some verbs, in particular of some stative verbs, can in fact be used to indicate the beginning of a situation (ingressive meaning).

つまり、動詞の完結相³ と非完結相とが形態上区別される言語においては、一部の動詞、とりわけ状態動詞の完結形が起動相を示すことがあるというのである。続けて Comrie (1976) は英語もこうした言語に該当すると述べる。

(3) [C]ompare also English *and suddenly he knew/understood what was happening*, where the meaning is also ingressive. (Comrie 1976:20)

(3) の例文中に *suddenly* が用いられているのは興味深いことだ。*suddenly* は突然何かが起こったことを表すのだから、たとえ文に用いられている動詞が状態動詞であったとしても、状態変化が生じたことが含意されるわけである。逆に言うと状態動詞の完結形が実際には起動相を表していることを明示する手段として *suddenly* が使えるということだ。状態動詞の完結形が起動相を示す場合、それが完結相を表している（例えば過去のある一時期にある状態が継続し

ていたが、現在はその状態にないこと) ではないことを明確に伝えたい場合には何らかの手段を用いるのが望ましいと予想される。ましてや(3)のような、完結形が起動相を表すことがあることを具体的に示すために用いられている例文にあってはなおさらのことだ。このように起動相であることを明示した場合に **suddenly** は有用だと考えられる。以上をまとめると、ある文に状態動詞と **suddenly** とが用いられていたら、それは状態を表すのではなく、(少なくともしばらくの間継続する) 状態への変化を表すということである。

しかしこれで(1)に対する疑問は何も解消されない。なぜなら(1)の例文で問題なのは「それを『状態』ではなく『突然の状態変化』だと解釈すべきこと」なのではなく「そのような状態変化が果たして突然起き得るものなのか」という疑問だからである。すでに述べたように日本語で考えると「突然お腹がすいた」というのは奇妙だ。そして実際問題としても「お腹がすいていない状態」から「すいている状態」への変化が突然生じるとは考えにくい。

ところが日本語で考えても「突然眠くなった」という文であれば、少なくとも筆者は違和感を覚えない。だからと言って現実に「眠くない状態」から「眠い状態」への変化が突然生じるものかという、それもまた考えにくい。するとこれは結局ことばの問題なのであって、日本語の場合「突然」という副詞は「なる」等の起動相を明示する動詞とともに用いなければならないということなのかもしれない。いくつか例文を見てみよう。

- (4) a. * 突然お腹がすいた。
 b. 突然空腹を覚えた。
 c. 突然眠くなった。
 d. ?? 突然疲れた。
 e. 突然疲れを覚えた。
 f. 突然疲れが出た。

ここから、日本語の「突然」はどうやら起動相を明確に示す動詞とともに用いられるものであるらしいことが見て取れる。それは逆にいうと、この制約さえ守っていれば、実際に「眠くない状態」から「眠い状態」への変化が突然生じることなどあり得るのかについては考えなくてもいいということなのかもしれない。他方(1)の例が暗示するように英語ではそのような制約すらないようだ。**suddenly** さえ使われていればそれが突然の状態変化を示し、そのような状態変化が現実突然起こり得るのかについては英語でも考えなくてもいい、ということなのかもしれない。

しかし「突然」というからには何らかの状態変化が突然生じていなければならない。ではその変化とは何か。これを解く鍵が(4b, e)の「覚える」という動詞であろう。つまり身体の状態が突然空腹になったり疲れたりすることは考えにくい、空腹や疲れを自覚することが突然であることはあり得るのである。そしてそれは(1)のような文でも同様だろう。例えば(1a)は次のように言い換えてもよいと考えられる。

(5) Ann suddenly realized that she was hungry.

ここで **realize** という語を用いたが、この **realize** について Comrie (1976) が、(3)の **know** と対比させつつ、次のような興味深いことを述べている。

(6) *Know* thus differs from *realise*, which refers explicitly to entry into a new situation, and can be used in the Progressive (*he's slowly realising what's happening*).
(Comrie 1976:20)

つまり **know** が基本的に「知っている状態」を示すのに対し、**realize** は「認識していない状態」から「認識している状態」という新たな状況への移行を示す動詞だということである。

以上の考察を踏まえた上で、次節では具体的・実証的な調査について見ていきたい。

3

本節では **suddenly** の振る舞いについてコーパスを用いて詳しく見ていく。もっとも本稿の目的は **suddenly** そのものの振る舞いではなく、あくまでも(1)に見るような文での振る舞いを観察することであるから、状態動詞と **suddenly** とが共起している例について考察する。とはいえ一口に状態動詞と言ってもたくさんある。そこで、「状態」を表す最も一般的な動詞は **be** であるから、本稿では対象を **be** に限定させて頂く。**be** と **suddenly** が共起することはあるのか。あるとすれば(2)で見たように状態変化を表すのか、それとも認識の変化を表すのか。この点についてコーパスを使って調査した。

3.1 調査方法

本研究の行った調査は具体的には以下の通りである。

まず **British National Corpus**（以下 **BNC** と略記する）を用いて **be** と **suddenly** が共起している文を検索してみたところ、多数ヒットした。ここで注意すべきはこれらは単に「同一の文中に **be** と **suddenly** とが現れる文」というだけのことで、**suddenly** が **be** を修飾しているとは限らないということだ。多数の例文がヒットしたのはこのためである。

そこでこれら多数の例文の中からランダムに300例を抽出した。さらにこれをもう一度繰り返し、合計600例を得た。もっともこのやり方と同じ例文が先の300例にも後の300例にも選ばれてしまっている可能性があるし、事実としてもそのような例文は見つかった。そこで重複して選ばれた例文は一方だけを残して他方を削除したところ、578例が残った。これは調査のために十分な量であると判断し、これら578例を対象とすることにした。

次にこれら578例について以下の点を調べた。

- (7) a. suddenly は be を修飾しているか。
 b. もしそうなら、be はどのような性質のものか。
 c. suddenly が修飾しているのが be でなければ、どのような動詞を修飾しているか。
 d. suddenly が修飾しているのはどのような事態か。

(7b) についてはもう少し詳しい説明が必要だろう。be は動詞として存在を表すのに加え、形容詞等を伴って状態を表すこともある。むしろ後者の用法の方が多用され、こちらが一般的な用法だと言ってよいと思われる。この「形容詞等」には現在分詞や過去分詞も含まれ、こうした用法での be は助動詞とされるのが普通である。be のこうした様々な用法のうちのいずれに該当するものが suddenly に修飾されているかを観察するのは極めて重要だと考えられるので、この点について調査した。

3.2 調査結果

3.2.1 suddenly が be を修飾している場合

全578例中、suddenly が be を修飾していたのは238例のみで、339例では別の動詞を修飾していた。これ以外に判断のつきにくかったものが1例あった。それを (8a) に示す。

- (8) a. At the end of August 1914 he was promoted to Brigadier on the field; so suddenly that an elderly spinster had to furnish him with stars unsewn from her father's uniform. (BNC: K91)
 b. Suddenly frightened, she wondered if she was going to have an operation[.] (BNC: H7H)

(8a) は suddenly が修飾している語が明示されていない例であるが、“he

was promoted to Brigadier on the field so suddenly that ...”の一部が省略されているのだと考えれば suddenly は was promoted を修飾していることになる。すると suddenly が be を修飾している例ということになるのでこれも加えると、全578例中 suddenly が be を修飾しているのが239例となる。

なお (8b) に見るように、分詞構文等のため being が省略されていることが明らかであり、かつ suddenly はこの省略されている being を修飾していると判断される文が21例（うち＜be＋形容詞＞15例、＜be＋過去分詞＞6例）あったが、これらは全て suddenly が be を修飾しているものとして239例の中に含めた。これに関して注意すべきは、こうした例はたまたまヒットしたのだということである。suddenly が修飾しているはずの being は実際には省略されているのだから、「同一文中に be と suddenly とが現れる文」という条件に合致せず、検索しても本来ならばヒットしないはずだ。ところが偶然、同一文中に suddenly とは全く無関係の be が— 多くの場合別の節中に— 現れることがあり、その場合に限ってヒットするわけである。例えば (8b) であれば同一文中に “if she was going” の “was” がたまたまあったがために拾われた例だと言える。この点には注意を要する。

3.2.1.1 be に形容詞が後続する場合

(1a) は suddenly が＜be＋形容詞＞を修飾している文である。これが本研究の出発点なのだから、手始めに＜be＋形容詞＞から見ていこう。

全578例中＜be＋形容詞＞に該当したのは73例で、筆者の感覚では予想よりも多かった。もっとも6割近くに相当する43の形容詞は一度現れているのみである。複数回現れたものを以下に列挙する。

- (9) a. 2回＝close, cold, conscious, full, harsh, more (than), (too) much, quiet, serious, strong
- b. 3回＝clear, (not) enough
- c. 4回＝aware

これはあくまでもコーパスの中から **be** と **suddenly** が共起している文をランダムに578例拾い上げたものの中での調査であるから、たまたま1例しか含まれなかった（実際にはもっと頻度が高い）、あるいはたまたま2例含まれた（実際にはもっと頻度が低い）形容詞もあるだろう。そのような中でも **aware** の出現回数が4回というのは例外的に多いと言え、**aware** が極めて頻度の高い形容詞であろうという点については信頼してよいものと思われる。加えて **aware** が人の認識を表す形容詞である点は重要である。

be aware は状態を表すが、(2)や(3)で確認したことを考慮に入れると、**suddenly** と共起すると起動相、言い換えると状態変化を表すと考えられる。これはすなわち **be suddenly aware** は **suddenly realize** と類似の意味を表すということである。第2節で見たように **suddenly** には「状態変化が突然であること」を表す場合と「認識の変化が突然であること」を表す場合の2つの用法があると予想され、両者を区別することが重要だと考えられるが、**aware** は認識を表す形容詞なのだから、**be suddenly aware** は後者、すなわち「認識の突然の変化」を表しているわけである。

clear は3回現れているが、うち2例が「明らかだ」という意味で用いられており（残りの1例については(16)で触れる）、人の認識を表していると言える。この点で **clear** は **aware** に近い（むしろ **be clear** の主語は「明らかである事柄」、**be aware** の主語は「認識している主体」という違いがあるが）。**be suddenly clear** は「突然明らかになる」ということだから「認識の突然の変化」を表している。さらに **conscious** も2回現れているが、いずれも(10c)のように「突然気づく、意識する」という意味で用いられている。このように認識を表す形容詞の頻度が高いことは注目に値する。

(10) a. Suddenly she was aware of how little she knew Roman.

(BNC: GUE)

b. ‘Silly, really, I’ve been sitting here puzzling about what to do and it’s

suddenly clear.’ (BNC: G3S)

c. As I lay in the ditch I was suddenly conscious of a very strong
indescribably sickly smell. (BNC: A61)

ではそれ以外の形容詞についても見てみよう。quiet、serious、harsh、close
などは実際に状態変化が突然起こり得る。quiet であれば騒がしかった周囲が
突然静かになることはあり得ることだ（なお quiet の 2 例の主語はいずれも it
で、その場の状況を指している）。類似の形容詞として silent が 1 例だけでは
あるが見られた。

(11) a. And it was so quiet, suddenly, that their ears seemed to be singing.

(BNC: EFJ)

b. ‘No,’ said Aline, suddenly serious[.] (BNC: G0M)

c. Cornelius’s voice was suddenly harsh[.] (BNC: H8T)

d. [H]e continued softly, his face suddenly very close to hers, ‘you made
a few wrong moves yourself, so this muddle is partly your fault too.’

(BNC: HGY)

e. His eyes were suddenly cold and implacable. (BNC: JY4)

f. Emily was suddenly cold. (BNC: CKD)

serious も、話し相手の態度が突然改まって真顔で話し出すということはある
得る。実際 serious の 2 例では主語はいずれも人であり、しかも一人称では
ない人物だった。なおすでに前節で確認したが、(11b) から分かるように
being が省略されている<(being) 形容詞>を suddenly が修飾している例も多
数 (15例) 見られる。

harsh の 2 例では、(11c) に見るように、主語はいずれも voice だった。つ
まりこうした場合の be suddenly harsh は「(声や口調が) 突然陰しく (きつ

く) なる」ことを意味するのであり、実際に突然起こっても不思議ではない状態変化を表していると言える。**strong** の2例のうちの1例でも主語が **voice** であり、しかも “**stronger**” と比較級の形で用いられていて、**harsh** と類似の例だと言ってよい。

(11d) は **close** の例であるが、これも「突然顔を近づけてきた」ということだから突然の状態変化が実際に生じている。**close** の2例はいずれもこのように状態変化を表していた。

このように実際に状態変化が生じている例が多数観察されたのだが、それが全てというわけではない。(11e) および (11f) は **cold** の例で、これらも基本的には状態変化が生じている例だと考えられるが、それぞれに興味深い点がある。(11e) では **cold** が **implacable** と並べられているのだから、ある人物が「目のあたりが冷たい」と感じた、というのではなく、他者の目から見るとその人物の目つきが冷たく、冷淡に（もしくは「冷酷に」）感じられるようになった、ということを表している。なので実際に目つきや表情に状態変化が生じたのだと考えられるが、しかし他者の表情の変化を単に「変化した」と捉えるのではなく「冷淡になった」と捉えるのはある面で観察者の主観の問題だとも言える。つまり (11e) の **suddenly** は基本的には「状態変化が突然であること」を表していると考えられるが、その状態変化とは「ある人物の目つきの物理的变化」と「それを捉える観察者の心理的な判断」との二重構造になっているのである。もちろんこれは「すでに目つきが冷淡になっていたことに突然気づいた」ということではないので、これまで述べてきたような（あるいは(1)に見るような）「認識の変化」とはタイプが異なるが、それにしても「突然の状態変化」と言っても決して単純なものではないことが分かる。

これまで「状態変化」と「認識の変化」の二つを区別してきたが、以上の議論を整理すると、実際には以下の三つに分けるのが適切だということになる。

(12) a. 物理的な状態変化

b. 人間の内面における変化（心理的・精神的変化、認識の変化、判断の変化等を含む）

c. 物理的な状態変化はすでに生じているのだが、それに気づいていない人がある時点でその変化を認識する、という変化

本稿がこれまで「状態変化」と呼んできたのは (12a)、「認識の変化」と呼んできたのは (12c) であるが、(11e) では (12a) と (12b) の二重構造になっているのだと言える。

さて (11f) であるが、何を意味するのかこの一文だけでは判断がつかない。そこで前後の文脈を確認すると以下のようなものであることが分かった⁴。

(13) ‘Hush, my dear, you don’t want your aunt to hear us talk ill about her son. Now listen to me, all you feel for your cousin is only a childhood fancy.’

His lip tightened.

‘In any case, things are different now, you must see that. The man is a rogue, he stole from his own firm and now that he is serving time in Swansea Prison, I could never allow him near you, let alone marry you.’

Emily was suddenly cold.

‘This is the first I’ve heard of your objection, father!’

She could hardly believe her own ears.

‘You know that Craig is innocent.’

文脈の中で捉えると「寒くなった、寒気がした」という意味であることが分かる。また (11e) が「他者の目から見て cold となった」ことを表しているのに対し、こちらは「Emily 本人が cold となった」ことを表しているのであって、同じ cold でも大きく異なる。加えて、Emily が心理的に寒気を感じたのは事実だが、物理的に気温が下がったわけではない。つまり (12b) の意味で

のある種の「状態変化」が生じたのだと言える。(11e)と(11f)とはこの点では共通している。ただ(11f)には(12a)の要素が欠けている。

さて次に扱うのは「程度を表す形容詞」とでも呼ぶべき形容詞群であり、具体的には(9)では(not) enough、full、more (than)、(too) much が相当する。これらについても状態変化と認識の変化のいずれが生じているのか判断が難しい。一つ言えるのは(12a)の「物理的变化」よりもむしろ(12b)の変化、とりわけ感情の変化が生じている例が多く見られたということだ。感情が急に高ぶり、ある一定の限度を超えとか、これまでの状態が物足りなくなるとか、そういった用いられ方のものが多い。

(9)で述べたように enough は3例見られたが、興味深いことに3例とも否定文中で用いられていた。これは言い換えると enough は「突然十分でなくなる」という文脈で用いられることが多いということである。そのため本稿では“(not) enough”と表記してきた。そのうちの1例を以下に示す。

(14) ‘Of course we can manage,’ she said and grinning added, ‘I’m a big girl now.’

Then suddenly that was not enough.

(BNC: A6J)

これは発言者である she が発言をし、その直後に気が変わって「今言ったことだけでは不十分だ、物足りない」と突然感じた、ということである。発言を終えた時点と気が変わった時点との間に時間の経過はほとんどないが、それでも発言を終えた時点では「この発言で十分」と感じていたはずなので（そうであれば後になって「不十分だ」と思い直すというのは論理的におかしい）、(12b)と(12c)との組み合わせ、すなわち発言者の内部で気持ちの変化が突然に生じ、その結果自分の発言が不十分だと認識するに至った、と分析すべきであろう。このように「程度を表す形容詞」に関しては突然の変化を(12b)

と (12c) との組み合わせとして捉えるべき例が多いようである。具体的に言えば「急に気が変わって我慢の限界に達している（あるいは超えている）自分に気づく」、あるいは逆に「急に気が変わってこれまで満足してきたものに物足りなさを感じている自分に気づく」という意味で用いられている例が多数観察された。

(15) a. Blood began to course into the gristle to make it erect again, and he was suddenly full of urgent need. (BNC: FPX)

b. The temptation to evade the truth was suddenly almost more than Harry could bear, so aching did he want to go home. (BNC: K8S)

c. But, ashamed and proud, the boy said nothing, until suddenly his feelings were too much for him. (BNC: GWH)

(15b) に見るように **more** の 2 例は < **more than** + 節 > というパターンで用いられており、果たしてこれらを形容詞の用例に含めてよいのか判断に迷うが、「程度を表す形容詞」の中に含めることにした。また (15c) に見るように **much** の 2 例はいずれも “too much” の形で現れており、興味深い。

さて、(9) で確認したように 2 回以上現れた形容詞がいくつか観察されたわけだが、すでに触れたように **clear** の 3 例のうち 1 例は他の 2 例とは意味が異なっていたし、**cold** の 2 例も (11e, f) で見たように意味が互いに異なっていた。これらを別の形容詞として数えるならば、結局のところほとんどの形容詞は一度きりしか現れていないということになろう。そういうわけで (9) で取り上げなかった、一度現れているのみの 43 の形容詞も重要だと考えられるので、これらについても簡単に見ておこう。まずは **clear** の他の 2 例と異なる例を見る。

(16) Down the clachan street he ducked and dodged through the retiring

clansmen, half-hidden by the smoke, Lachlan yelling after him, till suddenly they were clear of the huts and into the fight round the ships.

(BNC: APW、綴り等原文のまま)

(16)の **he** は **Lachlan** なる人物から走って逃げていて、結果として突然小屋のない場所に出た、ということである。したがって状態変化は生じておらず——無論 **he** が移動するという状態変化は起こっているが、「小屋がある状態」から「ない状態」へと突然変化したわけではない——起きているのは **he** が別の場所へと移動したことによって生じた認識の変化——「さっきまでいたところには小屋がたくさんあった」という認識から「今いる場所には小屋がない」という認識への突然の変化——であり、典型的な (12c) の例だと言える。

もっともこのような (12c) の典型的な例——それは (1a) もそうだが——は少ない。(17a) は一見すると (1a) とよく似ており、「彼女は喉が乾燥していることに突然気づいた」という意味かと思ったが、前後の文脈を確認すると、話し相手の発言を聞いて衝撃を受け「突然喉が乾燥しているような気になった」という意味だった。つまり (11e, f) に近い用法だと言える。また (17b) は (12c) の「認識の変化」の例と考えてよいと思われるが、「**suddenly** が **being prickly** を修飾しているが **being** が省略されている」というよりはむしろ「**suddenly** は **felt prickly** を修飾している」と考える方が適切な例のように思われる。

(17) a. Her throat was suddenly dry. (BNC: JY3)

b. Chas felt his hair suddenly prickly, as if it was full of nits.

(BNC: H83)

以上をまとめると次のようになろう。**suddenly** が < **be** + 形容詞 > を修飾している文は物理的な状態変化を表しているものが多く、認識の変化を表してい

るものは少ない。ただし「物理的な変化」ではなく「人間の内部における心の変化」を表しているものも少なからず観察され、そのような例では「心の変化」と「認識の変化」のいずれが適切か判断が困難なものも多い。もっとも認識の変化を表したい場合には **aware**、**clear** といった形容詞を用いて明示することが多く、こうした形容詞は他の形容詞と比べて頻度が高い。

(「suddenly 考 (2)」に続く)

注

- 1) (1b) については少々説明が必要かもしれない。この例文の出典はアメリカのティーンエイジャー向け現代小説で、主人公でもある一人称の語り手が基本的に現在時制で出来事を語っていく体裁を取った物語である。(1b) の **he** は主人公の兄を指し、主人公と兄は自宅の近くにある大木の根元に空いた大きな穴 (文中の **cave** はこれを指す) を長年、いわゆる「秘密基地」のようなものとして利用してきたことがこの文の背景にある。
- 2) 「到達 (achievement)」とは状態変化が瞬間的に生じる動作のことである。Vendler (1967:102) は次のように述べる。“[V] erbs like *knowing* and *recognizing* do not indicate processes going on in time, yet they may be predicated of a subject for a given time with truth or falsity. Now some of these verbs can be predicated only for single moments of time (strictly speaking), while others can be predicated for shorter or longer periods of time.”
この “some of these verbs can be predicated only for single moments of time” が「到達」に当たり、他方 “others can be predicated for shorter or longer periods of time” とあるのが「状態」に相当する。
- 3) ここでいう「完結相」とは(2)にもあるように **perfective** のことであって、英語では「**have** + 過去分詞」で示される **perfect** のことではなく、ま

た動詞の語彙的アスペクトの一種である **telic** でもないので注意。
perfective が「完了相」と呼ばれることもあるが、ここでは誤解を与えないよう「完結相」と呼んでおくことにする。

- 4) この一節の出典は BNC で “CKD” の id が与えられている文章であるが、これは Iris Gower 著 *The shoemaker’s daughter* という小説から採られたものとのことだ。

引用文献

British National Corpus <http://www.natcorp.ox.ac.uk/>

SGT = Raymond Carver, “A Small, Good Thing”, in *Where I’m Calling From*, New York: Vintage Contemporaries, 1989, pp.376–405.

SYH = Jo Knowles, *See You at Harry’s*, Somerville, Massachusetts: Candlewick Press, 2012.

参考文献

Comrie, Bernard (1976), *Aspect*, Cambridge: Cambridge University Press.

Croft, William (2012), *Verbs — Aspect and Causal Structure*, Oxford: Oxford University Press.

Dowty, David R. (1979), *Word Meaning and Montague Grammar*, Dordrecht/Boston/London: D. Reidel Publishing Company.

Vendler, Zeno (1967), “Verbs and Times”, in *Linguistics in Philosophy*, Ithaca, New York: Cornell University Press, pp.97–121.

On *suddenly*: Part 1

Kimihiko Kuromiya

This article proposes that the word *suddenly* has two senses, one which represents an instantaneous change of state, and the other describing a speaker's realization of a change of state that has already taken place before the utterance. *Ann was suddenly hungry* is an example of the latter.

In Part 1 we will verify the proposal above through observing some sentences, taken from *the British National Corpus*, where *suddenly* modifies <be + Adjective>.